

## ヨブ記38章1-3節 「ついに、語られる神」

### 1A 嵐からの語りかけ

### 2A 神の計らい

#### 1B 当然知るべきことを知らない罪

#### 2B 経綸を暗くする罪

### 3A 神に問われること

## 本文

ヨブ記 38 章 1-3 節を開いてください。私たちは午後に、36 章の途中から 39 章までを午後に学びます。ついに、ヨブと友人たちの議論、また若者エリフの主張を今日読み終え、神ご自身のヨブへの語りかけを読みます。ずっといっしょに読んでいった皆さんは、この時をいつかと、待ち遠しかったのではなかったのかと思います！よく忍耐されました、そして実は、これこそが神が私たちにヨブを通して教えたかったことです。「見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。(ヤコブ 5:11)」神は、私たちに忍耐を教えておられます。

私たち人間は、不条理なことが起こると、ずっと「なぜ？」という問いかけをします。「難しいことはいいから、とっとと分かり易く、一言で解答を下さい！」という思いを強くするのではないのでしょうか。私たちににとっての苦しみは、ヨブと同じように、財産を失ったり、病にかかったり、人に裏切られたり、そうした苦しみ自体よりも、「なぜ、こんなことが起こったのか。」という解答が得られないことの苦しみではないのでしょうか。これを難しい言葉で、「実存的な苦しみ」とお話ししました。

この問いを、そのまま神に直球でぶつけてきたのがヨブでした。彼は何度も何度も、神になぜこのような苦しみを味わわなければいけないのか、問うてきました。例えば、彼は、法廷を想定して、神の前で自分の訴えを並べたてて、言葉の限り討論したいと願いました。そう言った後に、彼は前後、左右に神がおられるか見まわしましたが、現れてくださりませんでした。(23:1-9 参照)しかしついに、神がヨブに現われて語りかけるのです。今朝の本文を読んでみましょう。

1 【主】はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。2 知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。3 さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。

この語りかけは、ヨブにとってだけでなく、私たちにとっても意表を付くものです。一つ目は、主が嵐の中から語られているということです。私たちは、神の語りかけを、静かで、穏やかな自然の中で語られたいと願わないのでしょうか？ヨブに対して、癒されるような太陽の輝きの中で神が現れて

くれそうなものですが、いいえ、嵐の中で語られています。

二つ目は、「この者はだれか」と神が言われていることです。ヨブがなぜ、このように苦しまなければいけないのかと問うているのですから、「なぜなら、…」という言葉から始まって、その苦しみに対する答えを与えてくれてもよさそうなものです。けれども、「なぜなら」という答えではなく、そのような問いかけをするお前は一体誰なのだ、あなた自身を知りなさいという言葉で神は返しておられます。

そして三つ目は、「わたしはあなたに尋ねる。」という神の言葉です。ヨブは神に対して尋ねる姿勢を貫いていました。何度も、何度も、神に対して訴えを付きつけてきました。しかし、連続して神に対して話しているうちに、神から聞くことを忘れていました。ヨブは自分が神に尋ねていたのに、神が自分に尋ねるということを想定していなかったのです。以上、この三つの点についてお話ししていきたいと思います。

### 1A 嵐からの語りかけ

一つ目、神がヨブについて語りかけられたのが「嵐の中」からだということについてです。1節をもう一度読みます。「【主】はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。」実はこの前に、エリフが語っている中ですでに天候が怪しくなっていました。エリフが語っていると、雨がぽつぽつと降り始めたのでしょ。そして黒雲が押し寄せて、一気に空に稲妻が走り、雷が地面に落ちたのではないかと思われます。それで、エリフは雷と稲妻を使って、続けて神について説教します。「37:1-5 これによって私の心はおののき、その所からとびのく。しかと聞け。その御声の荒れ狂うのを。その御口から出るとどろきを。神はそのいなずまを全天の下、まっすぐに進ませる。それを地の果て果てまでも。そのあとでかみなりが鳴りとどろく。神はそのいかめしい声で雷鳴をとどろかせ、その声の聞こえるときも、いなずまを引き止めない。神は、御声で驚くほどに雷鳴をとどろかせ、私たちの知れない大きな事をされる。」

私たちは、ちょうど二週間前、午後の礼拝を守って交わっている時に、稲妻が走り、雷が落ちてきました。私はここのエリフの言葉を思い浮かべていましたが、正直、「これが神の声なら、たまったものではないなあ。」とっていました。エリフがここで言っているように、心は慄き、その所から飛び退きます。しばらく建物の中で避難して、その嵐が過ぎ去るのを待つしかありません。

しかし、そこで悟ったことがあります。それは、「このような雷がなければ、何と人間は、自分たちのしていることを止めることはできないだろうか。」ということです。人間のしていることは、雷や稲妻の中で一気に止みます。自分がどんなことをしていても、それをいかに続けて行ないたくても、否が応でも止めて、恐れおののきつつ神のなされることを待ちます。人の業が全く介入できないこと、これが嵐の中での神の語りかけに現れているものでした。

したがって、神はしばしば嵐の中で語られます。私たちの人生に、生活に嵐があるからこそ、聞こえてくる神の声があります。しかし嵐が来れば、自分のしていることが乱されて、混乱が起こります。そして、これまで自分がしてきたことが台無しになることもあり、絶望します。しかし、それは必要な人生の過程です。なぜなら、これまでの自分の業が神との出会いの妨げになってきたからです。自分にはどうすることもできない、自分が全く制御できない位置に置かれている時に、初めて神を見る人が多いのです。

イエス様がガリラヤ湖の嵐を静められた時のことから教訓を得てみましょう。もう夕暮れでしたが、イエス様は向こう岸に渡ろうと言われました。そして弟子たちと舟に乗り込まれました。すると激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水がいっぱいになりました。ところが、イエス様はぐっすり眠っておられたのです！弟子たちはこう言いました。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。」イエス様は、波をしっかりとつけて風がやみましたが、こう弟子たちに言われました。「どうして、そんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。」(以上マルコ 4:35-41) イエス様の弟子への言葉は、ヨブへの言葉と基本的に同じです。嵐が起これば、自分たちでは何も制御できなくなります。ところが、弟子たちは主が何もしてくださらないことに文句を言っていました。ヨブと同じです。しかし問題は、主に対する信頼を失ってしまったのです。

聖書では世の終わりになると、国々が騒ぎ立つことを預言しています(詩篇 2:1)。ニュースを見れば、心を騒がせる話ばかりです。主は、ゼカリヤを通してこう言われました。「すべての肉なる者よ。主の前で静まれ。(2:13)」主がなされることを認めるには、まず静まって、神の前で完全に魂を服する必要があります。そこで初めて、聞こえてくる神の声があるのです。

## 2A 神の計らい

そして二つ目、「この者はだれか」と神が問いかけられている点を見ていきましょう。2節を読みます。「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。」ここで神は二つの点で、ヨブを叱責しておられます。「知識もなく言い分を述べ立てている」こと、そして、「摂理を」あるいは「経綸(新共同訳)」を暗くしていることです。

### 1B 当然知るべきことを知らない罪

「知識もなく言い分を述べ立てている」ということですが、ヨブはあまりにも不条理なことが自分の身に起こって、これはいったいどういうことか神に問いかけました。しかし、私たちに知らされている事柄は全貌のごく一部にしか過ぎず、神が私たちの思いをはるか超えたところで、ご自身の意思を行われています。だったら、そのことを教えてくれないか、と私たちは思うかもしれません。しかし、それは生まれたばかりの赤ん坊が、大人のしているいろいろなことについて文句を言っているようなものです。いいえ、小さな子が大人に対して言うことよりも、万倍も億倍もの違いがあります。神はその小さき者を愛してやまず、そのごく一部だけを示しながら、ご計画を実行されているのです。

しかし、ヨブは対等な立場で、同じ法廷で原告と被告という立場で討論したいと神に文句を言っていました。そこで神は、「お前は何者か。知識もなく言い分を述べ立てている。」と言われていたのです。そこで、そのわずかな知識だけでも示すことに神はしました。この地球の土台を神が敷いた時に、あなたはどこにいたのか。あなたは、海の底を見たことがあるのか。あなたは、雪や雹が空の中でどのように造られているのか、あなたは見たことがあるのか。自然界にある、圧倒的な知識をもって、神の計らいがヨブのそれを遥かに超えていることを教えられたのでした。

神は、この世界に二つの教科書を下さいました。自然と聖書です。難しい言葉で、自然は「一般啓示」そして聖書は「特別啓示」と呼ばれます。自然によって、また人の良心によって、私たちは神を知ることができます。しかし、知性や感情、意志を持つ人格的な神を知るには、預言者、そして神の独り子自身を通して示された聖書を読む必要があります。

自然界に啓示されている神を認めないと、人はその思いが暗くなり、無知になります。「ローマ 1:20-22 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、…」自然界に現れている、明らかにされている神の存在、その永遠性と力を認めないので、自分の思っていること、考えていることが暗くなり、見えるものが見えなくなり、聞こえるものが聞こえなくなり、人間として当然してはならないことをするようになるのです。

人間にとっての無知とは何でしょうか？「無知」という言葉を聞くと、私たちは「では教育が解決だ」と思います。知識がないから、その知識を与えることによって正しい判断ができるようにするように考えます。しかし、無知というのはそうではありません。当然、知っているべき事柄を拒んでいるので、見えるものが見えなくなっている状態であります。

アメリカで、人種や宗教の差別に対する実験をする番組があります。あからさまに人種差別発言をしている場面を俳優が演じて、そこでそのことを知らない人がその悪にどう対峙するのかを見る、ドッキリ番組のようなものです。黒人の人たちが集まる床屋が舞台になりました。あるお客さんのカールフレンドが白人でした。だから彼氏が髪を切ってもらっている間、椅子に座っていたのですが、店員の一人が、「あなたは白人なのだから、ここには駄目よ。」と言いました。それがいかに人種差別的発言か、他に髪を切ってもらっている客が抗議しました。けれども、その店員は言うことを聞きません。そこでその客が使った言葉が、「これでは、話してもしかたがない。無知は、直しようがないからだ。」というものでした。

これが、正しい「無知 ignorance」の理解です。人間として当然、皮膚の色の違いで待遇を変えてはいけないことは知っているのです。しかし、その知識を受け入れるのを頑なに拒んでいるので、

どんなにそれが愚かなことかを説明しても、思いを変えられないのです。

イエス様は、このような無知の罪に対して、赦してくださいと父なる神に願ったのが、十字架上のあの言葉です。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです。(ルカ 23:34)」ご自分を死刑に定め、群衆を煽っているユダヤ人宗教指導者がいます。そして、ここでイエスをからかっているローマの兵士たちがいます。そして隣で十字架につけられている囚人までが、「おまえがキリストであれば、俺たちを救え」と言っています。彼らは知ろうと思えば、イエスが聖書に約束されていた救い主、キリストであることは知り得たのです。しかしそれを拒んだので、無実の人間を罪に定める悪を行っていました。そして、その罪に対して、イエス様は「彼らは何をしているのか自分でわからないのです。」と執り成したのです。

ある人がこう書いていました。「人を殺す者も、差別する者も、騙す者も、盗む者も、姦淫する者も、みな自分が何をしているのか知らないからこそそのようなおぞましい罪を平気で犯しているのです。この無知のゆえに、人びとは神の御子であるイエス様さえ十字架につけて殺してしまいました。「知らなかった」では済まされないことです。<sup>1</sup>」けれども、主はその無知の罪を赦して下さるよう執り成し、そしてその罪のために死んでくださいました。

私たちは、神について知らされていることは数多くあります。しかし、それに対して服することをせずに、知らされていないことについて非難します。知ることについての欲求は果てしなくあるのですが、服することについての願望に著しく欠けているのです。これがヨブに対して神が語られた、「知識もないのに、言い分を述べ立てる。」ということにつながります。

## 2B 経綸を暗くする罪

続けて主は、「摂理を暗くするこの者はだれか。」と言われましたね。新改訳は「摂理」と訳しているところは、口語訳では「計りごと」、新共同訳では「経綸」となっています。私は新共同訳の言葉が好きです。経綸とは、神がどのような方法でこの世界を治めて、導いておられるかを教えるものです。それでは、ヨブに対する経綸、つまり神の取り計らいは、どのようなものだったのでしょうか？彼は潔癖で正しい人だったのに、一日にして、数多くの家畜、その羊飼いたち、そして十人の息子と娘を失いました。そして、重い皮膚病を患い、夜も眠れぬ日々を過ごしています。ここにある神の経綸、取り計らいは何なのでしょう？

これは極めて特殊なものでした。ヨブのことを正しく、潔癖であると誇ったのは、神ご自身です。しかしサタンは、「あなたが多くのものを与えているから、ヨブは、あなたを敬っているのではないですか。」と挑戦しました。神はヨブが正しいから、たくさんの物を与えているのではありません。しかし、サタンの告発に対して受けるために、財産に触れていいと神は言いました。皮膚に対しても触

---

<sup>1</sup> <http://www2.plala.or.jp/Arakawa/job51.htm>

れていいと神は許しました。それは、ヨブが神を敬っているのか、自分に財産が与えられているから、あるいは自分の健康が守られているからではないことを証明するためだったのです。したがって、ヨブがこれだけの苦しみに遭っているのは、神がヨブの罪を責めているのではなく、むしろヨブをサタンの責めから守るために、彼をかばうために与えられた神の配慮だったのです。つまり、神はヨブをこよなく愛しておられて、ヨブとご自分との関係を擁護しようとしておられたのです。

ヨブは、こんなに神に注目されていたなどと知る由もありません。こんなに深い、神の取り計らいがあるのに、それを神が自分を理由もなく責め立てていると言って、その経緯を暗くしてしまったのです。

神の取り計らい、経緯には、正義だけでなく愛もあります。愛というのは、定式化することはできません。二人以上のお子さんをお持ちの親御さんは、その教育方法を一つにすることができないのと同じです。いつも悩み、逡巡しながら決断し、それでもその決断が正しかったのか悩むような、心に関わることです。そして、愛は正義の測りにかけると不条理に思われるところに、その威力を発揮します。例えば、百匹の羊がいて、一匹の失われた羊のために九十九匹の羊を置いて捜しにいって羊飼いのようなものです。このような不釣り合いを成し遂げるのが神の愛です。

神は正義であられるのに、正義を裏切るような愛をどのようにして持つことができるのでしょうか？正義による経緯と、愛による経緯をいかに両立させればよいのでしょうか？そこで、神は究極の不条理を行われました。ご自分の子、キリストを十字架につけて、人の罪に対する罰を身代わりに受けさせたのです。ご自分の愛する独り息子をどうして、ご自分に反抗する者たちのために身代わりに罪に定めるようなことをさせるのです。こんな酷いことはありません。しかし、それはイエス・キリストがヨブのように、いや人間ヨブとは比べてはいけぬ次元なのですが、父なる神に信頼されていたから、愛されていたから、その酷い仕打ちを受けるようにされたのです。神が私たち罪人を一人一人救いたいと思う、神の愛の配慮、愛の経緯があるゆえに、無比の独り子が究極の苦しみを味わうようにされたのです。

キリストに十字架にある神の取り計らいは、このように私たちの思いを遥かに超えたものでした。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことがないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。(1コリント 2:9)」

ヨブは、特別な神の取り計らいの中で、呻き苦しみ、最も絶望しているような中で、突然、発する言葉が、非常に驚くものでありました。まさに、キリストご自身の働きを語っているのです。「16:19 今でも天には、私の証人がおられます。私を保証してくださる方は高い所におられます。」神の絶対的な正義を前にして、それでも自分を保証してくださる方が天におられると宣言しました。まさにキリスト・イエスがこのことをしてくださいませ。そして、「19:25-26 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、

私の肉から神を見る。」自分を罪から贖い出す、救い出して神のものとしてくださる方がこれから来られると宣言しました。まさに、イエスご自身のことです。

つまり、ヨブは自分の理解の中では到底、神の取り計らいを受け入れることはできなかったのですが、自分の存在として、すでに神の愛の取り計らいを経験していたのです。私たちは、頭では理解できないで、神と格闘してもがきながら、実はあなたのうちにキリストを現すべく神が働いておられることに気づく必要があります。キリスト者は、キリストがこの身に現れるために、まだ天に引き上げられることなくこの世に置かれているのです。

### **3A 神に問われること**

そして最後三つ目ですが、3 節の後半を読みます。「わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。」これからの話がとても面白くなります。ヨブはこれまで、何度も何度も神に問い続けました。ところが、神はその問いかけに答えることはされないのです。むしろ反対に、神ご自身がヨブに問いかけられるのです。そして最後まで読むと、神はついにヨブに、質問に答えることなく、問い続けられます。その結果、ヨブは悔い改めて、本当の意味で神を知ることになるのです。

神はご存知でしたのです。ヨブは神から聞くことによって、初めて答えを得られるということを知っておられました。神に問われることによって、自分が何者であるかを知り、心が探られて、そして聖められて、真実をもって神に会うことができるのです。「しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。(ヤコブ 1:19)」今の言葉は、しばしば対人の意思疎通の時に使われるものですが、実は神に対してそうなのです。神に対して聞くのに早くなっているか、語るのに遅くしているか、神の取り計らいに対して不満を述べたり、怒ったりしてはいないか、ということでもあります。

神に問うことは、とても良いことです。納得ができるまで問い続けたいという欲求は、ほめられるものでしょう。しかし、どこかの時点で自分自身が神に問われていることを知るべきです。神から尋ねられていることを知るべきです。そして神から聞くときに、そこに信仰が生まれて、そして信仰によって神に会うことができます。「このように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。(ローマ 10:17)」